

不定期版

センチメンタル・ジャーニー……その1

題名をみて、カメラを思い浮べる人は精神年齢がまだ若い。感傷的になる人なら壮年、横文字なんてアホらしいと思う人はそれ以上というところ。何にでも好き嫌いはよろしくない。

さて、昨晚眠れぬままにふと枕辺の本棚に手をやれば、何とはなしに一冊の地図帳が手に触れ、よくよく見ればその名を茨城県都市地図といい、県内の主な市町村が一目瞭然、よくわかる。パラリパラリめくるうち、かつて自分が住んだことがある町が目につれ、ふれればなつかしくなるのが人情、いくら人情紙風船とはいえ自分のこととなると話は全く別物、ガバとばかりに起き上り、じつくりと眺めることは相成った。日頃より愛用のコップに氷を入れ、これまた愛飲しているナポレオン＝ダ＝ルマを注ぎこみ、チビチビ飲みつつ眺めているうちに、酒の酔いも手伝ってか、自分の記憶と地図とが二重になり、何だか今も住んでいるような錯覚に落ち入ってしまった。

水海道市（4月1日現在 人口39,619人、9,443世帯）

昭和27～30年にかけて住んでいた頃は、町制から市制へと変る時期でもあった。正確には、昭和29年7月10日に水海道町が7村を編入して水海道市になったのだが、この時の記憶はほとんどない。

当時、橋本町に住んでいた私は、双葉幼稚園という私立のカトリック系幼稚園に通うことになった。毎朝一合の米を白い袋に入れてもらい、テクテク歩いて通園したのだが、一合の米は昼食の原料で、残った分がおかず代に化けるのであったらしい。現在の米飯給食もまっ青、まさに時代の最先端に行く感があった。

この幼稚園で思い出す女性が2人いる。1人は同じ園児の女の子で、名前はむろん覚えていないが、電機店の娘であった。髪の毛を右に分け、いつもヘアピンで止めているスタイルは、おかつぱ頭の多いこの頃なかなかモダンに見えたものである。ある日、勇気を出して彼女の家まで遊び

に行ったことがある。ところがあいにくの留守、男心は移り気なもの、行くまで張りつめていた緊張感がゆるむと同時に「何故に行ったのか」と悔みだす始末、結局それっきり二度と行くことはなかった。

もう1人は、最年少のクラスを受け持っていた新人の先生である。双葉幼稚園というのは3年保育から1年保育まであって、私は2年保育だったのだが、どういう訳か3年保育のクラスにも出役していたのである。もっとも放課後ばかりの出役ではあったが、それでも先生と一緒に遊んでくれ、そのうちに先生の家まで遊びに行くことになった。私鉄関東鉄道常総線の水海道駅の反対側であった様な気がするので、地図で確かめるとどうも瀬頭町あたりで、小貝川の近くではなかったかと思う。先生は母親との2人暮らしらしく、火鉢でモチを焼いて食べさせてくれた。モチが出てくるところから推察して、1月か2月頃だったようだ。夕方にはあいにくの雨模様、先生と2人で蛇ノ目の相々傘での掃り道、駅前まで迎えに来た姉とばったり出会ってしまった。この時は子供心にも残念であった。その後4月になって最年長のクラスになると同時に先生と会う機会もなくなり、それっきりになってしまった。

いずれにせよ、実に他愛のないものだったが、そこはそれ、思い出は常に美しく、かつほろ苦いものであるのだ。

家の裏には小さな沼があり、アメリカザリガニ、要するにエビガニがどっさりと住みついており、ついでに青大将も住みついてきたが、イカの切れはしを使ってのエビガニ釣りは盛んであった。バケツに一杯になるまで釣りが楽しめた。沼のわきには菜の花畑が広がり、春には一面黄色くなった光景を忘れることができない。

風のたよりでは、この沼はすでに埋めたてられ、住宅が建っているという。手元の地図ではそこまではわからないが、想像はできる。きっと今住んでいる所と大差ない風景であろうことが。

（伊 藤）

海底に沈んだ島

「昔々その昔、紀元前9,500年に大西洋の海底に沈んだ国家があったという。その名をアトランティスという」と書くと、すぐに眉にツバをつける人が多い。確かにこの国や民族について具体的な証拠は何もない。しかしだからといって、すぐには否定できないから話は俄然おもしろくなってくる。何しろホロメスの叙事詩「イリアス」を事実と信じて、本当にトロイを発掘したドイツのアマチュア考古学者ハインリッヒ・シュリーマンを例にあげることもできようし、あるいは現代の地球物理学では常識となった大陸移動説をあげることもできよう。いずれもその最初には証拠らしい証拠はなかったのである。

アトランティスについて知ることのできる唯一の資料については、今から2,500年前までさかのぼらなくてはならない。

ソクラテスの弟子であり、アリストテレスの師でもあるプラトン(B.C 427~B.C 347)は、広く世界を放浪し、エジプト、イタリア、シチリアなどを訪れている。彼の著作のうち10篇が現存し、そのうち2篇「クリティアス」と「ティマイオス」のなかで、アトランティスについて語っている。

プラトンはアトランティスに関する物語を祖父のクリティアスから聞いた。クリティアスはそれを「七賢人」の一人ソロン(B.C 640~B.C 560頃)から聞き、ソロンはサイスでエジプトの神官たちからこの伝説を聞いたのである。

それでは、アトランティスはどこにあったのだろうか。

「あなたたちがヘラクレスの柱(ジブラルタル海峡)と呼んでいるその海の入口の前面にひとつの島があった。この島はリビア(ギリシア人に知られていたアフリカ)とアジア(同じく小アジア)を合わせたものよりも大きかった。航海者にとっては、この島から他の諸島へいたる路がひらかれていたし、さらにそれらの島から、この本当の海(大西洋)をとりかこむ反対側の大陸(アメリカ大陸?)全体に渡航することができた。先にふれた入口(ジブラルタル海峡)の内側の海は、狭い入口とでもいうような一種の湾となっているが、その外側は本当の海とい

うことができる。それと同様に、これをとりまく土地(アメリカ大陸?)は公平に言って、本当の完全な大陸ということができるのだ。このアトランティス島にこそ、王一族の治める偉大な強国ができた。その権力は全島とその他の多くの島、さらに大陸(アメリカ大陸?)の一部にも及んでいた」

これらは、「ティマイオス」に書かれているアトランティスの海である。この記述をもとに、多くの人々が大西洋にその痕跡を探しているが、いまだに見つかっていない。見つければ、まさに世紀の大発見となるのだが。

「クリティアス」では、プラトンはアトランティス島の様子とアトランティス人の国家とについて詳細に描いている。

「ポセイドン(ギリシャ神話の海の神。クロノスとレアの子。ゼウスの兄弟)は、自分の領地としてアトランティス島をもらい、人間の妻の生んだ子孫をこの島に住ませたのだ。それは次のような地形のところだ。海から中央に向って、全島にわたる平原があり、それはあらゆる平原のうちでも最つとも美しくたいそう豊かな土地であるという。その平原に近く、やはり島の中央に向って、約50スタジオン(9km)の距離にひとつの山があり、そのあたりでは高くないほうであった。……ポセイドンには5組の双生児があって、アトランティスの王たる長子はアトラント(アトラス)と呼ばれた。したがって、全島および大洋もそれに因んでアトランティスという名称をもっている」

このアトランティス島では生活に必要なものがすべて手に入った。鉱物、特に金について価値のあったオリハルコン(どんなものかは、今ではわからない)などがとれ、動物も植物もおびただし量が産出されたという。

この幸福にみちた島も、一日と悲惨な一夜のうちに海中に陥没して消滅してしまった。まるで日本沈没のような話なのだが、第二・第三のシュリーマンが、一日も早くその謎を解いてほしいものである。

(伊 藤)